

『顔の現象学 見られることの権利』

(講談社学術文庫、1998年、鷲田清一)

直江 道愛

近頃「顔」がブームである。最近は「顔学会」なるものまで作られるようになった。しかしそれは逆に言えば、最近まで学問の世界ではあまりちゃんと取り扱われてことになったということでもある。最近の顔ブームは、顔というものが、考えてみれば当たり前のことであるけれども、実はとても大切なものであるということに気づかせてくれたと言っていい。

顔は、カテドラルのファサードのごとく、人間の正面玄関であり、人間と人間との関係が最初に始まる地点である。第一印象は、必ずしもその人の内面を忠実に反映したものではないゆえに、それにとらわれることは正しくないこととされてきたが、しかし往々にして顔の第一印象が事態の推移を決定づけてきたと言っても決して過言ではない。現実の日常世界では、顔は、その人間の中身にもまして、大切な役割を果たしている。人生の大きな転機を決定づけることもしばしばである。恋愛や結婚などがその典型である。特にお見合いなどは、その人の収入も大切であるが(しばしばそれが一番大切)、しかし同時に、顔は事の成り行きを瞬時に決定してしまうこともある。デジタル情報が電子的ラインの上を行き来するITの時代に、顔などはもう関係ないさ、などと考えるむきもあろうが、しかし写真撮影機能つき携帯電話が売り上げをのぼし、インターネットでも顔画像をともなったチャットなどが行なわれたりするのを見ると、われわれはコミュニケーションから顔という要素を消去してしまうことの難しさについて考えさせられることになる。そもそも顔の完全なる消去は、何かしら犯罪めいたニオイを感じさせるのではないか。われわれは一方で匿名性を志向しながら、他方で顔を介した生のコミュニケーションへの志向も捨てきれずにいるのだ。捨てきれずにいるどころか、何らかの形で顔を伝え、あるいは顔を知りたい、という欲望が何かにつけて頭をもたげてくるのを無視することができないのである。

顔は人間関係の出発点であるが、最近の風潮では、その終着点でもあるらしい。自分の手帳に所狭しと貼り付けたプリクラ写真のコレクションは、ただひたすら顔の収集であり、そこにならんだ大量の顔の集合体を見ることで、「私にはこんなに友達がいるんだ」という、そこはかとない安心感と満足感を得ることが出来る。たとえそれが友達の単なる表象の集まりに過ぎず、実は友達と呼べる人間関係が皆無に近い孤独を覆い隠す道具になっているだけであったとしても、である。顔は、このようにきわめてわれわれの存在に密着し、われわれの関係を形成し、われわれの人生を左右するものであるのだが、先にも述べたが、これまできちんと論じられてこなかった希有なものの一つである。特に哲学や思想は顔を正面から取り上げることはあまりなかった。

「顔は見えるものなのか。顔は面なのか。そもそもここにある(はずの)この顔、それはわ

たしなのか。もしそうでないとすれば、それはだれに向けられているのか。それへと向けられている（はずの）他人の顔も他人そのひとでないとすれば。あるいは、わたしの表、他人の表？ では表って何だろう……。」（219頁）

本書『顔の現象学』は、「そんな謎だらけの顔について」（220頁）鷺田清一が、フランス哲学者モーリス・メルロ＝ポンティの現象学的視点を土台に多角的に論じている大変興味深い一冊である。メルロ＝ポンティは、「身体」というものを通じて「見えるもの」に存在する「見えないもの」を考え続けた哲学者である。彼は顔の重要性に気がついていた。「〈顔〉は、かれの現象学や存在論を集約するような根源的な場所」（230頁）である。すなわち、「〈顔〉は身体の極限、現象学は、〈顔の現象学〉に極限化する」（231頁）こととなるのである。

本書が顔というものに関して取り上げるのは、モーリス・メルロ＝ポンティ、ライナー・マリア・リルケ、安部公房、大岡昇平、多田智満子、ゴンブローヴィチ、清水アリカ、三島由紀夫、ジャン・ジャック・ルソー、エマニュエル・レヴィナス、マックス・シェラー、〈顔〉の政治性を問題にするジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリの哲学、レヴィ＝ストロースやピエール・クラストスなどの文化人類学などなど、実に多様である。本書の構成は以下の通りである。

- I 〈顔〉
- II 顔の規則
- III ほんとうの顔？
- IV 顔の所有
- V 顔の外科手術
- VI 震える鏡
- VII 転写される皮膚
- VIII 魂のパスゲーム
- IX 負の仮面
- X 不在と撤退
- XI 不可能な顔
- XII 見られることの権利

本書の内容には、大まかに言って三つの論点（段階）がある。第一の論点（段階）は、「顔の現象」。第二の論点（段階）はエマニュエル・レヴィナスの「他者の顔の絶対的な、非・現象性」。そして第三の論点（段階）はライナー・マリア・マルケを用いながらの自己の「顔の現象」について。そして総論として、「見られることへの呼びかけとしての顔」（218頁）へと辿るのである。

第一の論点について。まずは、現代社会における「顔」について、特に、われわれはなぜ化粧をするのか、ということが問われる。M・ギューとE・ルモワヌ＝ルッチオーニの論考が

考察される。

「つねに問題となるのは、「新しいお肌」をつくること。素顔の皮膚を、媒体のすべすべした表面で置き換えることだ。メイクされた顔が「透明」なのは、直接的な表面しか見せるものがないからであり、「ピチピチした、気持ちのよいお肌」を持つことは、じつは、皮膚だけにしか居られない、他の場所には行けない存在になることである。」(103-104頁。M・ギュー「欲望の屍体解剖・欲望の美学」について)

「衣服で身体を覆うことは、顔にコミュニケーションの優位を譲ることであるが、仮面は身体をふたたびコミュニケーションの道具にする」と『衣服の精神分析』のなかで彼女は言う。衣服で身体を覆い隠すことによってひとはコミュニケーションの中継地点(あるいは「人間的」な意味が凝集する場所)を顔面へと凝集させるが、仮面で顔面を覆うことによって(あるいは顔面に顔料を厚く塗りこめることによって)顔面の意味作用が消去され、それと反比例して、身体の各部位がその減却された意味作用を回復するということである。そして後者の手法を様式化したのがパントマイムだというわけだ。われわれの身体表面における人称化の動性と脱人称化の動性、あるいは、だれかになることとだれかでなくなること、この二つの契機が顔と身体のあいだで交差する。」(46-47頁。E・ルモワヌ=ルッチオーニの言葉)

ここでは現代社会における、モードの記号やコードの運動に則った化粧やメイクアップの施された「顔」が問題とされている。顔を作ることは、本来の顔とは別の顔を出現させることであるが、しかし、日常生活の中で、そして社会の中で使用されるという点では、本来の顔も作られた顔も同じである。「われわれがふつう接するのはそのうち一つか二つの顔に過ぎない。しかもその顔は、それがだれに向けられるかによって、まるでチャンネルを変えるかのようにそっくり変化する。そのうちどれが本来の顔、あるいはありのままの顔かと問われたら、だれもが返答に窮するだろう。」(16-17頁)しかし、鷺田清一によれば、「本来の顔、あるいはありのままの顔」は、「顔の現象」として表現されるものではなく、「顔の非・現象性(non-phénoménalité)」175頁)にこそ「本当の顔」があるのではないだろうかという。顔に関して、いわば脱-中心化が行われるわけである。それでは「顔の非・現象性」とはいったい何なのか。第二の論点を見て行こう。

「顔の非・現象性」については、E・レヴィナスの思想が取り上げられる。レヴィナス(『存在するのは別の仕方、あるいは存在することの彼方へ』)によれば「隣人の顔は表象から逃れる。隣人の顔は現象性の欠損にほかならない。とはいえ、隣人の顔があまりにも不意に、あまりにも乱暴に到来するからではない。ある意味では、現れることさえできないほど薄弱な非現象であるがゆえに、現象「以下」のものであるがゆえに、隣人の顔は現れることなき現象性の欠損にほかならないのだ。」(175頁)

顔における現象性の欠損は、顔との関係が対象の認識ではないことから生ずる。なぜなら、顔が象徴として現れることもなければ、表象としても現れることはないからである。言い換えるならば顔が「見えるもの、かたちあるものとして現れることがない」からである。すなわち、

他者の顔は「像として、肖像として造形的に現れる」(apparaître plastiquement comme une image, comme un portrait) ではない。つまりレヴィナスは、「その意味で、顔は他の主体の存在を指示するシニフィアン¹の交響曲としての「表情のたわむれ」ではなく、それ自身が「不在の痕跡」である」(175 - 176 頁)と主張するのである。レヴィナスは『われわれのあいだで』のなかでも、「顔は、顔とは反対のものにおいても意味を持ちうるのです！このように、顔は、目の色や鼻の形や頬のつやなどのことではないのです」(169 頁)と指摘している。

鷺田清一はこうしたレヴィナスの主張を肯定し、「顔は見られるべき視覚的イメージではないし、読まれるべき表現なのでもない。いいかえるとそれは、肖像や表情なのではない。像や記号なのではない。にもかかわらず、顔はわたしを呼びだす。不意を討つようにして迫ってくる。が、顔はそれを手厚く迎えることがないと、あるいはその極微の震えに感受することがないとすぐに消えてしまう。顔とはそのような傷つきやすい現象でもある」(3 頁)とも指摘している。

第三の論点は自己 (soi) の「顔の現象学」についてである。これまで見てきたように、そもそも「顔」というものは他人、他者に向けられたもので、実は本人のものではない。もちろん、皮膚としての「顔」は私の肉体に張り付いているが、「顔」そのものは他者のほうに向けられたものなのである。「顔」は、「見えるもの」に存在する「見えないもの」の意味なのである。「顔」は、もはやだれかれの「顔」でさえなく、単純に「顔」、しかし、深く「見られることの権利」あるいは「見られることへの呼びかけ」以外のなにものでもない。こうして「顔の現象」とは、「顔」を記号へ縮減する装置としてある一方で、その「見られることの権利」に向かって「顔」を解き放つ冒険」(196 - 197 頁)と言われるに至る。そうした呼びかけには、対象として見るという対応ではなく、それを聴き、それに応えることが求められるという(215 頁)。顔についての現象学は、応答という実践に結びついた地平を切り開くこととなるのである。

われわれの生活世界はこのような実践の総体によって構成されている。実践なき世界、実践なき社会はおよそ考えられないし、たとえ考えられたとしても極めて不毛である。しかし本書の著者は、こうした「見られることへの呼びかけとしての顔」(218 頁)が、今日、見えにくくなっていると警鐘を発する。現代文明は、人間の顔を見えにくくし、人間の存在を不透明にし、人間の生そのものを巨大なシステムと非人間的な混乱の中でかき乱し、翻弄している。われわれはいつの日にか、みずからの「顔」をみずからの存在のもとに取り戻すことができるのであろうか。